

フローラ・アニー・スティールの『水の面を』について

小西真弓

序

「インドのイギリス女性がイギリス人とインド人が友人として出会うことを不可能にした」¹⁾ という批判は、エドワード・トムソンをはじめとする多くのアングロ・インド小説家に語り継がれてきた。彼らにとって、家事一切をインド人の使用人に任せ、暇を持って余しても現地の社会や言葉には興味を抱かず、白人社会に閉じこもる「メムサーヒブ」²⁾ は、原住民との溝を深める存在に感じられた。確かに19世紀の後半以降、イギリス男性が本国から同伴するようになった妻や、夫探しにやってくるイギリス女性の相手をするようになって、インド人との付き合いを制限され、彼らとの意思疎通を遮られたのは事実のようである。とはいえ、近年英領インドに滞在したイギリス女性の回想録や物語の発掘により、イギリス女性の植民地への関わり方が必ずしも一枚岩的でなかったことが明らかにされ、植民地支配の破綻の責任をメムサーヒブに押し付けることに異議が唱えられるようになった。実際に彼女たちの中には、宣教師あるいは教育者として大英帝国の発展に積極的に貢献した者もあった。本稿では、19世紀後半にイギリス女性の中で初めてインドの教育視察官の職を得たフローラ・アニー・スティールの代表作『水の面を』(*On the Face of the Waters*, 1896年)を取り上げ、帝国主義に組み込まれた作者がいかにフェミニズムの問題をとらえたかを検討してみたい。

I

19世紀後半に夫に伴ってインドへ渡ったイギリス婦人の役割といえば、「安定した環境を提供して夫の肉体的、精神的な健康を維持し、本国の規準を体現してヨーロッパ人社会内の

1) Allen Greenberger, *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism, 1880-1960* (London, Oxford UP, 1969), 105 参照.

2) *memsahib*, 英語の *madam* とアラビア語の *Sahib* を合成したヒンドゥー語で、インドの大反乱の年代からインドのイギリス女性を指す言葉として使われた。An Anglo-Indian Dictionary: Glossary of Indian Terms Used in English and of Such English or Other Non-Indian Terms as Have Obtained Special Meanings in India, ed. by George Clifford Whitworth (London, Kegan Paul, 1885) 204 参照.

緊張を和らげること」³⁾であった。植民地にあっても中産階級以上のイギリス女性には、ヴィクトリア朝のジェンダーの役割や道徳律を守り、植民地を維持する男性の保護を受けつつ「家庭の天使」として彼らを支えることが期待されたのである。帝国建設の妨げになりそうな彼女たちがインドに送り込まれるようになった背景には、同胞の男性をインド女性の誘惑から遠ざけ、アングロ・サクソン人種の純潔を守らせるという当局の思惑があった。「忙しい夫を除いて約60マイル四方に、ひとりぼっちだった」⁴⁾という環境におかれたステール夫人が原住民の社会に足を踏み入れ、土着の文化に触れたのは例外であり、大都市のアングロ・インド社会に滞在するメムサーヒブは、インド人社会に関わりをもつことや使用人への命令語以外の土語を覚える必要がなかった。「現地の文化や風習の侵入を食い止める防波堤のような役割が期待された」⁵⁾彼女たちが、インド人と個人的に交際することはタブー視された。それ故に、彼女たちは原住民の社会に関する知識に欠け、彼らとの間に距離を置く冷たく不寛容な存在に映りがちであったと思われる。

メムサーヒブのインド人に対する無知、無関心は、『水の面を』のヒロイン、ケイト・アールトンの「原住民は何を考えているのかわからず、恐ろしい慣習や筆舌に尽くし難い考えに縛られているので、嫌悪感を覚える」(10)というインド人観に反映されている。しかし、それは当時のインド在住イギリス女性の通念であり、彼女は『ビルマの日々に』登場するラッカーステーン夫人ほどには、⁶⁾原住民に対して意地の悪い不寛容なメムサーヒブとして描かれてはいない。なるほど本国のイギリス女性に比べれば、メムサーヒブたちは育児や家事をインド人の使用人に任せられたので、暇を持て余したかのように思われるが、ラックナウの自宅の庭園をイギリス風に保ったり、夫のアールトン少佐の友人や知人を自宅のパーティーに招いてもてなすといったような彼女の「家庭の天使ぶり」には、怠惰で無力な有閑夫人というイメージは投影されていない。それどころか、夫と人妻のアリス・ギッシングとの不倫に心を悩ませ、二人の仲を穏便に清算させようと努力する彼女は、優しく忍耐強い良妻賢母であり、その寛容な性格は二人が気まぐれに競り落としたアウド王家の傷ついたオウムの世話を引き受けて生き返らせるというエピソードからも窺い知れる。無論、夫とアリスの不倫関係は妻としてのプライドを傷つけ、アールトン少佐自身の評判も落とすものでもあったが、「家庭に対する崇拜がいわば宗教のようなものであった」(22)彼女にとって感情を露わにしたり、事を荒立てるのは得策ではなかった。そのために、彼女は誰にも知られることなくアリスのもとに向いて二人の仲を清算させようとする。またアールトン少佐が競馬でいかさまをして名誉を失いそうになった折には、恥を忍んでそれを告発しようとする物語の主人公ジェイムズ・グレイマン(別名ジム・ダグラス)に、唯一の財産であるダイヤモンドと引き換えにその件を不問にしてくれるように懇願する。彼との議論を通して、愛する

3) Ronald Hyam, *Empire and Sexuality: The British Experience* (Manchester, Manchester UP, 1990) 120.

4) Flora Annie Steel, *The Garden of Fidelity: Being the Autobiography of Flora Annie Steel 1847-1929* (London, Macmillan, 1929) 104.

5) 井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』(講談社, 1998) 49.

6) George Orwell, *Burmese Days* (1934; rpt. Harmandsworth, Penguin Books, 1975) 19-21 参照.

ことのできない夫との結婚生活に限界を認識させられるものの、家庭的価値にしがみつくような生き方を改めるすべは彼女にはなく、何とか一人息子のために「夫に償いのチャンスを与える」ことをグレイマンに承諾してもらう。

夫の不品行を取り繕おうとするケイトの言動は、「ヨーロッパ人社会内の緊張を和らげる」とか、支配階級の対面を保つという意味では帝国の維持に貢献するものと見なされる。しかしそれは「母性保護」という問題を抜きにすれば、「女性には厳しく男性には甘い」ヴィクトリア朝の性道徳のダブル・スタンダード（二重規準）に意義を唱えるフェミニズムの観点からは賞賛されるべきものではない。⁷⁾ しかし物語の設定年代において、彼女のようなミドル・クラスの女性には、たとえ夫が浮気をしてそれだけでは離婚を求めることができず、慰謝料を取ることもできなかった。そればかりか、当時は結婚時の持参金さえ夫の管理下におかれ自由に持ち出すことが不可能だったと言われる。また、そもそもミドル・クラスの結婚そのものが相思相愛を前提としたものであったとは言い難く、身分相当な生活をするために意に染まぬ結婚を余儀なくされるケースもかなりあったようである。そのためにケイトのように結婚後も夫婦の営みが苦痛であったり、アールトン少佐のように妻に女性としての魅力を感じない男性もあったようである。にもかかわらず離婚が少なかったのは、ミドル・クラスの女性にとってレディにふさわしい仕事を自得して自活したり親権を主張するのは困難であり、男性の方は妻側から離婚を申し立てられることが少なく、妻に不満があれば適当に浮気をしたり娼婦を拾うことができたからである。

ケイトがプライドを捨ててアリスやグレイマンと交渉する背景にはそのような事情があり、彼女の立場には多少なりとも作者自身の境遇が重ねられる。夫の不品行に悩まされることはなかったとしても、作者がヘンリー・スティールと結婚したのは、恋愛感情からでもインド行きを望んだためでもなかった。母親の持参金を浪費した父親のせいで没落した家庭の六番目の子供であり、学校教育も満足に受けられなかった彼女としては、家族の知人であるインド高等文官のプロポーズを受けることは経済的な選択だったようで、その結婚には「愛がなかったように思われた」⁸⁾。してみれば彼女のようなイギリス女性の帝国建設への加担は、一人の女性としての自立や権利を唱えるフェミニズム的な課題とは必ずしも親和せず、彼女の描くメムサーヒブたちにアンビバレントな性格が刻印されているのも理解できる。

II

良妻賢母型のケイト・アールトンに比べると、浮気に走るばかりではなく、かつて「黒い血が辿れる」役人と結婚して子供まで生んだアリスは、人種の純潔や女性の貞節を重んじる帝国主義者にとって脅威とも言えそうな存在である。にもかかわらず、彼女がインドのイギリス社交界に出入りできるのは、再婚相手で「俗悪だがすばらしいビジネスマン」と見なさ

7) ヴィクトリア朝の性道徳のダブル・スタンダードとフェミニズムについては、J.A. and Olive Banks, *Feminism and Family Planning in Victorian England* (New York, Schocken, 1974) 107-21 参照。

8) Steel, *op.cit.*, 27.

れるギッシング氏の財産のおかげであった。その財産もまともな商売によって得たものではなく、「遺伝的に愚かだ」と彼が見なすインド人を出し抜き市場を操作して築き上げたものである。そんな夫の人種観に影響されたのか、アリスにとってもインド人は「他者」であり、自分の乗った馬車がインド人の幼女をひき殺しても、「人間を殺した感じがしない、白人の幼子だったらもっとすまなく思う」(63)ほどである。しかし、彼女はインド人の乳母に育てられたせいか、「肌が白いか黒いかで人に対して抱く感情が違うのは邪悪だ」(63)という意識を持ち合わせるし、土語を多少なりとも理解するという意味では、原住民に対する関心が全くないわけではない。原住民の側からすれば、乳母に愛着を感じ、混血の男性を夫に選んでその子供を生んだ彼女は、そんな彼女を白眼視するメムサーヒブほどには、人種差別的な冷たいイギリス女性には感じられないであろう。

それはともかく、インド人に関する無知やインド人を乳母に雇うことさえ嫌うイギリス女性の差別意識を批判した作者には、⁹⁾ 人種的傲慢さの低いアリスは、メムサーヒブのタブーを犯したとはいえ、救い上げる余地がある存在に感じられたのであろうか。もっとも物語の執筆当時において本国では女性のセクシュアリティがフェミニズムの問題として取り上げられるようになり、アングロ・インド小説の中で植民地のイギリス人のモラルの低下が遠慮なく物語られるようになったことを考慮すると、一般的な読者にはアリスもそれほど常軌を逸した存在には感じられなかったかもしれない。「人間の官能的な側面を嫌う」という作者は、¹⁰⁾ この問題について深く論議することは憚られたようであるが、実際にはインド帝国のイギリス人のモラルの低下を目の当たりにして黙っていられなくなった。彼女はパンジャブ地方の駐在地で放蕩にふける高官や浮気をするイギリス女性を説得して悔い改めさせ、彼らの対面を取り繕ったという。¹¹⁾

このような時代背景や作者自身の体験に注目すれば、セポイの反乱の勃発時にアリスが隣家に住むイギリス少年ソニーを一身を挺して救い、その勇気と義侠心を称えられて葬られるという物語の展開もさほど読者の意表を突くものではなかったと思われる。ケイトでさえ、いち早く反徒の動向を察して見事な決断力を示したアリスに感服しその罪を許す気になる：

ケイトはソニーを助けることさえできなかったが、少なくとも言い聞かされていることを実行すること——ひとりで死ぬことはできた。

いいえ！ ひとりぼっちではない！ 彼女はベッドの方を振り返って、まるで眠っているかのようなほっそりした姿を見た……これが彼女の同胞が亡くなった姿だった。この女はケイトにとっては、最も大きな誤ちを犯した。どんな誤ちだというのか。疑念がぼんやりと湧いてきた。情念の要求や権利を認めようとしない人間に対して、アリスがどんな間違いを犯したというのか。彼女が、この何も気にかけることがなかった女が何を盗んだというのか。アリスの心は、全く傷つくことがなかつ

9) Steel夫人は、インドで暮らすイギリス人の役割を守りつつも、インドの原住民の生活から距離を置き続けるメムサーヒブに批判的であったと言われる。Nancy Paxton, "Feminism under the Raj: Complicity and Resistance in the Writings of Flora Annie Steel and Annie Besant", *Women's Studies International Forum* 13 (1990) no. 4, 333-46 参照。

10) この点に関してはViolet Powell, *Flora Annie Steel: Novelist of India* (London, Heineman, 1981) 1 参照。

11) Steel, *op.cit.*, 122-27.

た。ただ母性だけが、母性とは聖人にも罪を犯した人間にも与えられるものだった。

正にこの女にも与えられたのだ。この小さな手は勇敢な母親の手だったので、ケイトはそっと自分の手を差し出して、アリスの手に触れた。それはまだ温もりが残っていて生きているようだった。同胞意識が湧き上がってきた (233-34)

アリスに対して「情念の要求や権利」を認めないケイトがこのような同胞意識を抱くだけではなく、グレイマンをはじめとする軍人たちも尊敬の念を抱くようになるのは、彼女が「大英帝国の母」の役割を命がけて果たし、未来の帝国建設者を守ったからであるが、それはメムサーヒブにとって不倫の罪を償って余りあるものだったのであろう。アングロ・サクソン人種の子孫を生み育てること、彼らを命がけで守ることは妻として貞節を守ることに勝るとも劣らない彼女たちの重要な義務であったように思われる。確かに本国と比べて乳幼児の死亡率が倍以上のインドにおいて、子供たちは彼女たちにも帝国建設に専念する男たちにとってもかけがえのない宝であったことは想像に難くない。そのために、アリスを含めたメムサーヒブやその子供たちを殺害されたイギリス側のインド人に対する報復的な行為も正当化されたようである。しかしこの点に関してイギリス側のモラルの低下や過剰な暴力も描かれている『水の面を』には、大反乱を背景にして、イギリス人の武勇を称えるだけのアングロ・インド小説家とは異なるフェミニストの眼差しを感じさせるものがある。

III

アリスの理想化が明らかにするように、「母性主義」という観点からは、イギリス帝国主義は一見それを持ち上げて女性の権利を拡大しようとしたフェミニズムと矛盾するものではない。無論、現代的な観点からは「大英帝国の母」としての役割を強調することは、母性のみならず女性の役割を狭めることになり、女性の自由や権利を求めるフェミニズムとは齟齬をきたすようにも思われる。しかし「家庭の天使」が尊ばれる19世紀後半のイギリスでは、女性の自由な生き方を提唱するよりも母性をかざすほうが、女性の権利を高めるための得策であった。従ってフェミニストにとっても帝国主義者にとっても、純潔を守りつつイギリス人の人種的価値を次世代に伝える母性は貴重なものであったと言える。

しかし、本国ではともかくインドにおいてはイギリス女性が自らの母性を満足させることは現実的には困難だった。まず、当地の厳しい自然や医療環境下で、子供を無事に出産することも、乳幼児をすこやかに育てることも容易ではなかった。また当時、イギリスの子弟はインドでヨーロッパ式の学校教育が受けられず、インド人の乳母や召使にかしずかれて育てば、帝国を担うジェントルマンやレディにふさわしい人格が育たないということで、本国の親族のもとへ預けられるのが慣わしであった。中には、子供に付き添って夫と別居する生活を選ぶメムサーヒブもあったと言われる。しかし、誘惑の多いインドに自分の夫が独身でいるのは心配だったし、妻との別居を拒否する男性も多かったという。結局、メムサーヒブにとって良き妻であること＝帝国主義の加担者であることと、母性を満足させることは両立しえない課題であった。

この点に関して、スティール夫人は子供より夫との生活を選択したことから、「フェミニストである以上に帝国主義者であった」¹²⁾ というような評価を下される。なるほど彼女は『完璧なインドの家政婦，料理人』(1894)の中で、「子供の要求よりも夫の願いを優先させるのが得策だ」¹³⁾ と述べていることから、そのような評価も的外れではないように思われる。しかし、結婚後間もなく周囲にヨーロッパ人がいない環境に置かれ、病に倒れた夫の看病に四苦八苦した彼女には、子供のために夫と別居することは憚られたのであろう。また自分も熱病に倒れたり長女を死産したために、以後の妊娠が期待できずに生んだ次女をインドの辺地で育て上げることに危険を感じたに違いない。一人娘を本国の祖母のもとへ預けた作者は、周囲に慰めてくれる女友達もなく、別離の悲しみや孤独感を夫の仕事の手伝いに夢中になることで癒したのではないだろうか。一人の女性としての生き方に差こそあれ、アリスがわが子の墓に花をたむける姿には、長女をインドの大地に埋葬した作者の像が重ねられる。そういえば、彼女が帝国主義的な視座からメムサーヒブを描く一方で、母性を満たすことのできない彼女たちの苦難に共感し、次の様に自分たちを批判的に描くアングロ・インド小説家に怒るのも理解できる：

山岳地方へ行くこと！ その台詞を耳にしたイギリス人が、夫が留守の妻、浮気、スキャンダル、軽率さを思い起こすのは誰の過失なのか。それが、別離の悲劇を省略して山岳地方の駐屯地の物語を語る人々の過失であることは確かだ。イギリスのインド支配は男性にも女性にもその悲劇、驚くべき自己犠牲を強いたというのに。¹⁴⁾

メムサーヒブが夫と別居中に浮気しやすいというエピソードが事実無根でないことを滞印中に見聞したにもかかわらず、作者がこれほど怒るのは、インドにおいてヴィクトリア朝の性道徳規準もジェンダーの役割も曖昧になってしまう事実により自己矛盾を感じるからであろうか。フェミニストとしては男女間に同一の性道徳規準を要求するべきだったが、彼女は本国にはあるはずの娯楽や家庭の幸せも奪われ、インド人の性風俗に刺激を受けるイギリス人に同情を禁じえず、その道徳的弛緩には憤りつつも寛容にならざるを得なかったのであろう。そのような気持ちは、物語の中ではアリスに対してばかりではなく、凡そ品行方正な紳士とは言えないグレイマンやアールトン少佐が、インドの大反乱の鎮圧に活躍して名誉を取り戻すという物語の筋立てにも反映されている。

IV

アウド王室の馬の訓練士や競馬の旗手として生計をたてつつ、ペルシア系の女性ゾラと同棲生活を送るグレイマンは、同僚の妻と不倫を犯して軍務から追放された過去をもつ。アングロ・インド社会のはみ出し者になった身には、「美しいばかりではなく、幼少時に誘拐さ

12) Indrani Sen, *Woman and Empire: Representations in the Writings of British India, 1858-1900* (Hyderabad, Orient Longman, 2002) 135 参照.

13) Flora Annie Steel, *The Complete Indian Housekeeper and Cook* (London, Heineman, 1898) 199.

14) Flora Annie Steel, *The Potter's Thumb* (London, Heineman, 1894) II, 113.

れて客を取らされ始める年齢になった繊細な感じの子供であった」(28) ゴラは多額の金を払って売春宿から身請けする価値のある存在に感じられたのであろう。グレイマンは彼女をデリーの隠れ家に囲い、内縁の夫婦生活を送るようになった。二人の8年間ほどの生活は、公にはできなかつたものの、双方にとってそれなりに幸せなものであつた。しかし、アウド王家が廃されて失業した彼は、彼女との生活に縛られて帰国もできない身の上に次第に嫌気がさすようになってしまう。40歳にさしかかり、故郷のスコットランド北部の山々もむしよように懐かしくなつた。そんなグレイマンは日陰者の生活を送り続けて衰弱したゴラの最期を優しく看取るが、彼女が他界して東洋的な生活から解放された気分になる。ゴラは「女」としては愛するべき対象であつたが、民族性や信仰の異なる彼女との間にある「深い溝」は、彼には乗り越えられなかつた。なるほど知人の中には、土着の女性と家庭をもって子供まで作るイギリス人もいたが、グレイマンはゴラが死産した時に安堵感を覚えるほど、混血が生まれてくることに抵抗を感じていた：

彼らは混血という考えに満足だつた。混血民族の子供を育てるということに、グレイマンはどうだろうか……ゴラは泣いた。彼女は泣いた。グレイマンが生まれてきた自分の息子が呼吸をしていなかったのを怒るかもしれないと思つて泣いた。だから彼は彼女を慰めた。彼はゴラが死産して安堵したとは決して口にしなかつた。子供ができるということに嫌悪感を抱くとは一度も彼女に言わなかつた。(38)

英領インドにおいて、いわゆるユーラシアン（インド人とイギリス人の混血）が差別された事実を顧みれば、グレイマンのこのような心情に、イギリスの読者が眉をひそめたとは思えない。道徳観念の問題はさておき、インドで反英感情が高まつた時勢にあつて、原住民に関する知識や土語を駆使できる彼は、当局には必要な人材となり諜報部員として採用される。手下にした原住民から変装術を習つてアフガン男に化けたり、時にはヒンドゥー教徒のふりをして、イスラムやヒンドゥーの知識人が民衆に反英感情を吹き込む様子を報告するといったようなグレイマンの活動は、軍部の高官の期待に沿うものであつた。反乱が勃発してからも、彼の馬術の心得や原住民の心理をつかんで利用する能力は、ケイトを助けたり、イギリス軍を勝利に導くために大いに役立つ。ジョン・ニコルソンらに手柄を称えられた彼は、大反乱が鎮圧された後に退役軍人として帰国を許され、スコットランドの故郷で平和な生活を送ることになる。

グレイマンと比べると、アールトン少佐の軍人としての功績は取るに足らないように思われるが、メラートの蜂起をデリーに告げるために、命がけて馬を駆ける彼の姿には軍人魂が感じられる。その役目は他の誰一人として買ってでるものがなかつた。少佐の競馬でのいかさまで多大な被害を蒙つたグレイマンが、道中の川で身動きの取れなくなつた彼を発見し、伝令の使命を引きついでアリスの救援も承諾するというエピソードは、帝國的使命に燃えるイギリス男性の団結力を象徴するもので、二人は共通の敵を前にして同朋意識を取り戻す。

それにしてもグレイマンが反乱を生き抜き、アールトン少佐は反徒からの流れ弾に当たつて落命しヴィクトリア十字勲章の候補にあげられるという運命は、ケイトにとって何と好都

合な成り行きであろうか。彼女がデリー市内で生存していることを知らされても喜ばないアールトン少佐に憤る女性読者は、彼の死に溜飲が下がる思いがしたに違いない。彼女たちには、グレイマンの道徳的弛緩は寛恕できても、「家庭の天使」に徹したケイトを裏切ったアールトン少佐は許し難い存在に映ったのではないだろうか。二人の男性の運命の差にこそ、男女不平等なヴィクトリア朝の性道徳の二重規準に目をつぶりながらも、それに抵抗したいという作者の複雑な思いが込められているのであろう。それは、そもそもイギリス女性を巻き込んだ帝国主義が男女同権を求めるフェミニズムとは完全に親和するものではなかったためであり、それが作者にフラストレーションをもたらしたように思われる。

V

インドの植民地におけるジェンダーの役割の曖昧化について、グリーンバーガーは「正しいと信じられていた男性的な価値を体現する限り、インド在住のイギリス婦人の多くは個人的には、好意的に語られた」¹⁵⁾と指摘している。このアングロ・インド小説に関する彼の指摘は、メムサーヒブに対するスティール夫人の見解、即ちインドの大反乱に巻き込まれたケイトとアリスの行動を分析、評価するうえで大いに参考になる。ここでいう男性的な価値とは、「原住民の前では臆病さを見せることなく、威厳を保たなくてはならない」というような姿勢も含まれるが、それはとりわけ非常時においてメムサーヒブたちに義務付けられたといわれる。アリスに関しては、彼女が蛇にかまれそうになった折にグレイマンの指示通り、助けられるまで微動だにせず耐えて周囲から賞賛されるエピソードがそのような事情を物語っている。メムサーヒブたちは彼女が示したような泰然自若とした態度を、日常生活においては「インドの家庭はインド帝国と同様、威厳なくしては平和に治められない」¹⁶⁾と作者が述べるように、原住民の召使の前で示さなくてはならなかった。彼らに恭順の態度を取らせることは、メムサーヒブの重要な務めであり、彼女たちは夫にこそ従属を余儀なくされる立場に置かれたが、原住民に対しては権威をもつ支配者であったと言える。さらに、インド人反徒に襲われたアリスやケイトのように、子供たちや自分の名誉を守るために、男性のように勇敢に戦わなくてはならない場合も想定された。「いざとなったら言われたとおりひとりで死ぬる」というケイトの言葉は、男性によって課せられた価値観が、「家庭の天使」に徹した彼女の心にも浸透していることを窺わせる。彼女やアリスが拳銃の扱いを教えられているのも、帝国を命がけで守るという「男性的な価値」を体現させるためであり、暴徒から貞操を守るために自決することが期待されたからでもあった。またインドでは本国にあっては許されない狩に女性が参加できたという事実も、植民地におけるジェンダーの役割の曖昧化を示唆している。

このような帝国主義の風土下にあつて、程度の差こそあれメムサーヒブたちは自分たちも男性がもつべき権力や役割を担っているという意識に目覚めたようで、それは何よりもイン

15) Greenberger, *op. cit.*, 29.

16) Steel, *The Complete Indian Housekeeper and Cook*, 133.

ド女性の教育問題に取り組んだ作者の経歴が明らかにしている。なるほど1850年代に設定された物語の中では、作者が活躍した年代の急進的なフェミニズムは浮き彫りにされていないが、インドの大反乱を体験したケイトの意識の変化を通して、「家庭の天使」という生き方の限界、女性の自助努力の必要性等が問題にされている。

アリスの殺害現場に居合わせたケイトは、グレイマンに救われて難を逃れ、デリー城に避難させられる。しかし、反徒に包囲され身の危険を感じた彼女は、自力で脱出してイギリスの宿営地へ戻る。そこにはイギリス人の姿はなく、途方にくれ疲れて眠り込んだところを再びグレイマンに救われ、彼の病気の妻を装って町中の隠れ家に匿われる。その家で、寡婦の殉死から彼が救った若いラージプートの未亡人、タラの世話を受け、ひとまず危険は回避できたものの、いつまでたってもメラートからイギリスの援軍が到着する様子もなくグレイマンは苛立つ。ケイトの身の安全に気遣う彼は、町中に出て思う存分スパイ活動をするわけにはいかない。土語も理解できなければ周囲に原住民の知人もなく、デリーの地理も不確かな彼女を、別の場所に連れ出すのは危険だった。彼女が町中にあるのは、へたに援軍を呼び寄せて報復のための市街戦をけしかけるのも憚られる。軍事行動が起こせずに苛立つ彼の様子を見たケイトは自分が彼の重荷であり、あらためて「帝国に女の居場所はない」というような無力感に襲われる。グレイマンにとっても彼女との生活は、ゾラとの東洋な牧歌的生活を思い出させるために次第に精神的な負担となり、ヒンドゥー語を習いはじめるケイトの姿を見て彼は憤りさえ感じる有様であった。戦時下にあつて、「女はちっぽけな生物だ」(294)と見なす彼の生きがいは、「女との生活から逃げ出して男らしく戦う」ことだった。

しかし、実際にはグレイマンが男らしく戦場に駆けつけ手柄をたてられたのは、彼を病から回復させたケイトの看護のおかげである。女子供を足手まといに感じながらも、彼はケイトがイギリス式に入れる紅茶や、手作りのチキン・ブローズによって病が癒され、英気を取り戻す。また東洋との牧歌的生活を振り返りがちだった彼のイギリス魂を蘇らせたのは、アリスの乳母から返されたソニーの面倒を見るケイトが醸し出すイギリスの家庭的雰囲気だった。このようなエピソードから、ケイトはグレイマンに軍事行動の足手まといでありながらも、かけがえのない協力者でもあったと言える。また習い覚えたヒンドゥー語のおかげで、彼女がムガールの皇太子妃の一人、ナワシ・ベガム (Nawasi Begum) から命を救われたり、タラの助けを借りつつ独力でボートを漕いでイギリス陣営へ避難するという彼女の自助努力には、「デリーは女たちを助けるために失われた。問題の発端は自分たちが女たちのご機嫌を取るようになったことにある」(286)というグレイマンのセリフ、即ちインドの大反乱の元凶を、メムサーヒブの存在に押し付ける近視眼的な見解に反駁したいという作者の願望が投影されている。

VI

インドの大反乱に巻き込まれたグレイマンとケイトが危機を脱し、帰国後に二人で幸福な人生を贈るという物語のハッピー・エンドに大きく関わっているのは、インド人たちの協力

や自己犠牲的な精神である。中でも、グレイマンのスパイ活動に協力を惜みず、彼やケイトの命を救うために大活躍したタラの存在なしには、二人は結ばれることもなければ生き延びるのも困難であったと思われる。

タラがグレイマンに懸命に尽くすのは、12年前に他界した夫と共に彼女が火葬されそうになったところを彼が救い出し、ゾラのメイドとして雇って自活の道を歩ませたからであった。だがグレイマンのタラに対する人道的な行為は、彼女をヒンドゥー社会のアウトカーストの立場に追いやった。確かに1829年以来イギリスによってヒンドゥー寡婦の殉死は法律で禁じられ、その再婚も1856年に認められるようになったが、相変わらずタラのような子供のいない若い寡婦は、とりわけ不吉な存在として一族から忌み嫌われた。イギリス人の定めた法律では許されても、高カーストの男性が寡婦と再婚すれば村八分になるのが慣習で、実際には寡婦が新たな夫を得るのは殆ど不可能だった。高カーストの寡婦たちには剃髪が強制され、女らしい衣装や装身具を身に着けることも許されなければ、自由に外出することも一族の儀式に参加することも認められなかった。そのために違法となった後も長年、夫と共に荼毘に付されることを望んだヒンドゥー女性も少なからずあり、インド各地で寡婦の焚死が黙認され続けた。彼女たちは生き地獄よりも夫のために殉死して、人々から「サティー」(貞女)¹⁷⁾として崇拜される道をしばしば選んだという。

タラが夫の火葬用の薪の上に自ら進んで身を置いたのか、あるいはそれが親族による無理強いだったのかは物語の中では明らかにされていないが、髪の毛を切ろうとした姑に抵抗したことを考慮すると、16歳だった彼女に寡婦の惨めな生活に耐える覚悟や自殺願望があったとは考えられない。髪の毛も切らずに装身具を身につけ、キリスト教徒のグレイマンに仕えることを承諾した彼女には、人並みに生きることへの執着があったに違いない。しかし、同胞からアウトカーストと見なされることは、誇り高いラージプートとして生まれた彼女には耐え難い屈辱だった。やるせない気持ちを彼女は、グレイマンではなく彼を夫の葬儀に導いた双子の兄ソーマにぶつけるが、その複雑な心境は次のように描かれている：

グレイマンは火葬用の薪の上からタラを救い出した人物であった。だが言い換えると、タラが聖女になれずに全くのアウトカーストになってしまったのは彼のせいだった。なぜなら誰一人、他の寡婦たちでさえ、天国の入り口で神から追い返された女と一緒に食べたり飲んだりしようとしなからず。そんな精神状態は西洋人には殆ど理解できなかった。タラ自身をも困惑させるものであった。尊厳と墮落、感謝と怒り、執着と嫌悪の入り混じった意識は時々、彼女自身さえも当惑させた。

(30-31)

タラが遅まきながらガンジス河に身投げして「サティー」になろうとするきっかけは、グレイマンから世話を頼まれていたゾラの他界である。自分の存在価値も生活の拠り所も失ったように思えた彼女は、あらためて剃髪し寡婦の粗末な衣装を纏って入水の準備を整える。ところが、彼女の自殺願望に気付いたグレイマンにそり落とした髪の毛の束を取り上げら

17) サティー (Sati, Suttee) の原義は「貞淑な妻、貞女」。サンスクリット語 *Sat* に由来する。特に夫の亡骸と共に火葬される有徳で貞淑な妻を意味する。英語ではその寡婦の殉死行為を指すようにもなった。An Anglo-Indian Dictionary, op.cit., 283 参照。

れ、思い止まらざるを得なくなる。本来、神聖な髪の毛は夫と共に火葬されるべきであり、それがなくては「サティー」になることはできなかった。グレイマンから将来の生活費や住居の保証はされるものの、ゾラが囲われていた彼の隠れ家に留まることに抵抗を感じた彼女は姿をくらます。グレイマンが指摘するように、夫の死後12年もたってから後追い自殺をしても聖女として崇められることはないが、「サティー」願望はその後もタラに取り付いて離れなくなってしまう。¹⁸⁾

そんな彼女の思いが天に届いたのか、タラはある日ガンジス河の辺で祈りを捧げるうちに火傷を負い、その傷がヒन्दゥー教徒から神聖視されるようになって聖女に祭り上げられる。それから彼女はしばらく修行者の集まるデリーの片隅で暮らす。反乱の兆しが高まる中で諜報活動に彼女を利用しようと思ったグレイマンによって探し出されてしまう。

グレイマンに再会したタラは、懐かしさのあまり彼を反徒の目につかぬようにかばったり、病気の妻だと偽って隠れ家に連れて来られたケイトの世話も引き受ける。グレイマンに利用されるだけにもかかわらず、タラはひたすら彼の言いつけどおりにケイトを人目にふれぬように守り続ける。しかしケイトがグレイマンの妻ではないことを知らされ、「裏切ったら殺すかもしれない」とまで言われたタラは、次第に彼女に嫉妬の感情も覚えるようになり、グレイマンに対する忠誠心とその期待に背いて「サティー」になる気持ちとの板挟みになる。

結局、グレイマンへの忠誠心を優先する気持ちになった彼女は、ケイトを安全なイギリス陣営に送り込むことを思いつき、兄ソーマの協力を得て彼女を隠れ家から聖者スリ・アナンダの所有するヒन्दゥー寺院へ連れ出す。そこにしばらく身をひそめたケイトは、タラが手配したボートを一人で漕いで、何とかデリーの町を脱出してイギリス陣営に辿り着き、保護される。

首尾よくケイトを避難させたものの、タラは入れ違いにイギリス陣営からデリーの町中に戻ったグレイマンが病に倒れたので、ガンジス河に入水することもできず、隠れ家に戻って彼の世話をする。しかし、自分の看護では病から回復しそうな彼の様子に危機感を覚えた彼女は、イギリス陣営に駆け込んでケイトに助けを求める。デリーはイギリス側にほぼ奪還されたものの町中に戻ることは危険であったが、ケイトはタラの願いを聞き入れ、グレイマンの看病に駆けつける。グレイマンが彼女の手厚い看護で健康を取り戻し、彼とケイトの仲むつまじい様子を見たタラは、デリーの奪還戦の残り火で燃え上がった隣家の屋根から身を投げて落命する。

VII

寡婦の殉死とは見なされないタラの最期は、自殺を罪とするキリスト教徒の読者の目には、狂気とも捉えられるだろうか。ジェニー・シャープは、燃え上がる家の屋上に立ちほだ

18) ジェニー・シャープはタラの描写に、作者のサティーに関する曖昧な見解が反映されていることを指摘している。『水の面を』の中でタラが述べる「サティー」は、「寡婦の殉死行為」ではなく、「貞女」という意味をもつ。Jenny Sharpe, *Allegories of Empire: The Figure of Woman in the Colonial Text* (Minneapolis, University of Minnesota, 1989) 106-07 参照。

かるタラの姿に『ジェーン・エア』に登場するバーサの像を連想して物語の顛末を解釈している。¹⁹⁾ 確かに異民族間の恋愛や結婚問題を扱った19世紀のイギリス小説の例にもれず、タラが愛するイギリス男性のために都合よく抹殺されているという印象は否めない。しかし、彼女が自害することで「サティー」願望を達成し、インドの大反乱鎮圧時に復讐心に燃え上がったイギリス軍人や、イスラム教徒からの凌辱を免れたと仮定すれば、彼女の最期を「屋根裏部屋の狂女」の死と比較するのは、ヒンドゥー女性の尊厳を過小評価するような解釈ではないだろうか。なるほど作者はイスラム教徒が大多数であった地域に滞在したためにヒンドゥー教徒に対する観察が不十分で、タラの描き方にも曖昧さが目立つ。しかし、少なくとも物語に登場するイギリス人やイスラム教徒と比べれば、彼女は最も貞操観念のある誠実な人物として描かれているのではないだろうか。彼女が神聖視されるエピソードや「私はサティーだ」(“I am suttee”)と繰り返されるセリフが寡婦の貞節願望であることを考慮すれば、その最期は嫉妬や狂気から来る自殺というよりは、むしろグレイマンへの思いを断ち切ろうとした彼女のヒンドゥー魂の表明と解釈されるべきであろう。

そもそもタラのような高カーストに生まれついた女性には、キリスト教徒の妻や愛人として生きることは墮落であり、それこそ天国への門を永遠に閉ざす行為に思われたはずである。ヒンドゥー寺院に避難するケイトを寡婦に変装させようとしたタラが、髪の毛を切らせるのを中止するのは、キリスト教徒のケイトと自分との間には踏み越えられない一線があることを再認識したからである。異教徒のケイトには、夫の死後もヒンドゥー寡婦に倣って自らのセクシュアリティを封じ込めるために剃髪することも、後追い自殺をする必要もない。「サティー」になれるのは、女性の純潔を重んじるヒンドゥー教徒の寡婦だけであった。とすれば、女性の過度のセクシュアリティを社会悪の根源と見なす作者にとって、²⁰⁾ 女性の生きる権利を踏みとじるヒンドゥーの教えは忌まわしくも、その貞操観念を重んじる側面に対しては畏敬の念を禁じえなかったのではないだろうか。

「サティー」崇拜の背景にある女性のセクシュアリティの問題に深入りすることは、ナンシー・バックストンが指摘するように、女性作家としての人気を損なうものであったために、²¹⁾ 『水の面を』においては、タラの官能性はさほど強調されていない。ドゥルガー祭りの行列に加わる彼女の半裸の姿は、グレイマンを驚かすものの、彼女が神の化身のごとく祭り上げられていたとすれば、世俗的な欲求の表れとは見なされない。

脱俗化されたタラと比べると、巷のインド娼婦や宮殿のイスラム女性たちが世俗的な欲求に満ちた存在として描かれているのは、作者にとって彼女たちが男性を動かすほどの官能性をもった恐るべき存在に映ったためであろうか。²²⁾ 教養あふれるナワシ・ベガムでさえ、未

19) *Ibid.*, 103-10 参照。

20) スティール夫人の娘、マーベル (Marbel) は、このような考え方を作者が晩年まで払拭できなかったことを指摘している。Steel. *op.cit.*, 290 参照。

21) Nancy. L. Paxton, “Rape in British Novels about the Indian Uprising of 1857”, *Victorian Studies* 36 (Fall 1992) 27 参照。

22) 作者は、パルダの中のイスラム女性が性に関して意識過剰であると確信したという。Steel. *op.cit.*, 121 参照。

亡人でありながら義理の甥のアブール皇子と恋仲になるために、極めて開放的な官能性をもつ存在に感じられる。²³⁾ もっともアブールと同年齢の処女寡婦であった彼女が、イスラムの恋歌を歌いながら勉学と称して自分のもとへ通う彼と親密になるのもごく自然の成り行きのようにも思われる。

そのようなロマンスを楽しむ二人の命をムガールの王妃、ジナート・マハールが狙ったかどうか史実は定かではないが、物語の中で王妃は愛息、ジャワーン・バフトを玉座につけたために、彼の異母兄弟を側近に毒殺させた容疑者として描かれている。確かに宮廷内で後継問題をめぐって陰謀が渦巻いていたのは事実であったようだが、彼女自身がそこまで姦計をめぐらす人物として描かれているのは、自民族中心主義的なイギリスの歴史家のムガール宮廷の描写が真実のように感じられたためであろうか。²⁴⁾ ジナート・マハールがバハードゥル・シャー皇帝やセポイたちを扇動する場面は、次の様に描かれている：

「この謀反人たちはほら吹きです。メラートには2千人のイギリス兵がいるではありませんか。こいつらの話はありません。奴らは負け戦から逃げ出して、陛下を犠牲にして助かろうとする嘘つきです。」

王妃はかっとなって侍医に向かって言った。「神のご加護があれば何でもできるのではありませんか。陛下は信仰の守護者ではないのですか。」

「でも、5人の逃げ出してきた謀反人の守護者ではありませんよ」と侍医はあざ笑うように言った。

「陛下、どうかイギリスからもらっている年金のことをお忘れなく。」

ジナート・マハールは侍医のずる賢さに目を見開いて怒った。この議論に彼女はあらゆる創意で挑まなければならなかった。

「5人ですって！」彼女は声を響かせて、格子窓の方へ駆けつけた。「それでは、奇跡がきつと起こりますよ。5人が50人になります。ご覧下さい陛下、お聞き下さい！彼らがいかに信仰の守護者を求めているかを。」

軽やかに彼女が格子窓を大きく開けると、たちまち視界がひらけ、「王妃様！、王妃様！」と叫ぶ声にさらされた。その声は、「ああ！信仰の守護者バハードゥル・シャー様、我等を信仰のために死ぬようにお導き下さい」という他の声に交じていた……

「信仰のために！」とジナートは甲高い女の声で叫んだ。「もしお前たちが男なら、私が男だったら私のような女を愛するが、信仰のために立ち上がれ！」……

王妃は彼らに男のように呼びかけた。女としての自分を語りながら、思いがけなかった！——もちろん場違いだった——しかし感動的だった。彼らの血が騒いだ。すぐさま女のために戦う男の本能が目覚めた。

(213-14)

実際にセポイたちが王妃に上記のように扇動されたとは思えないが、ジナート・マハールがムガール皇帝への年金を廃止して、一族をデリー城から立ち退かせようとしていたイギリス人たちに憎悪の念を抱いたことは想像に難くない。また若くて美しい彼女が80歳を超えたバハードゥル・シャーに多大な影響力をもっていたことも否定できない。町中の女たちがセポイたちに蜂起するように煽っていたように、王妃にもイギリスに反旗を翻したい気持ち

23) ナワシ・ベガム (Farkhoonda Zamani, 別名Nawasi Begum) とアブール皇太子 (Abool-Bukr) は実在した人物であり、二人の恋愛関係も事実に基づくといわれる。Daya Patwardhan, *A Star of India: Flora Annie Steel, Her Works and Times*, (Bombay, A.V. Griha Prakashan) 43 参照。

24) Patwardhanは、作者が宮廷内の陰謀に関して、ウィリアム・ケイ (William Kay) や G.B. マレソン (G.B. Malleson) の史書を参考にしたことを示唆している。Ibid., 44 参照。

が十分にあったと思われる。しかし、「王妃が王位継承問題についてのイギリス側の回答に気分を壊して以来、チャパティをのせた盆がここ数週間、木曜日ごとに行き渡るようになったこと」(104)、つまりジナート・マハールが宮殿から反乱の合図を送ったのが真実であったかどうかはともかく、それだけで王位継承問題に無関係な民衆や地方の豪族たちまでが立ち上がったとは考えられない。なるほど作者はインド各地に拡大した反乱の発端に関して、豚や牛の脂が塗られた菓包の問題やアウドの併合を不満に思う原住民の声も取り上げていることから、宗教や伝統を重んじるインド人の立場に無理解であったとは言えない。しかしジナート・マハールの野望によってセポイが蜂起したような語りからは植民地支配の破綻の責任をムムサーヒブからインド女性に転嫁しているような印象すら受ける。もっとも、イギリスの利益を優先した支配体制そのものが大反乱の原因であることを認識していたとしても、ムムサーヒブであった彼女がそれを口にするのはタブーであった。物語をしめくくるにあたり、作者は帝国主義を正当化するあまり、インド女性に犠牲をしいたことに後ろ髪を引かれる思いがしたのであろうか。恋人を虐殺されて失意のどん底に陥ったナワシ・ベガムが大反乱終息後、デリーの町に女子学校を設立したという後書きには、インド女性に対する「白人女性の責務」を想起した作者の償いの気持ちが感じられる。

おわりに

『水の面を』をインドの大反乱を背景にした歴史小説として評価すると、作者がインドへ出向いて資料を入念に調べ、生き証人から事件の取材をしたというこの物語は、メラートの蜂起やデリーの攻防戦についてはほぼ史実どおりであり、その価値は極めて高い。²⁵⁾ しかし大反乱の原因についてはインド側の不満の声をあまり強調せず、反乱を鎮圧したイギリス側の武勇を誇りその支配を正当化しているために、帝国主義のプロパガンダ的な作品であるという印象も否めない。ジナート・マハールを中心とした宮廷の陰謀によって大反乱が企てられたというエピソードは、出版当時の読者からも受け入れられなかったと言われる。²⁶⁾ もっとも作者が正規の高等教育を受けられず、インド高等文官の妻、即ちムムサーヒブであったことを考慮すれば、物語の語りがイギリス支配に好意的で、インド人の立場にたった政治・経済的なヴィジョンに欠けていることも当然であろうか。20世紀に至っても、野蛮な反徒を鎮圧したイギリス側の勝利を謳歌するだけの「反乱小説」が出版され続けたことを思えば、イギリス側のモラルの低下や行き過ぎた報復行為を隠蔽していないこの作品は、大反乱で妻を失った読者が「この小説を読んでインドを許せるようになった」²⁷⁾ という感想を抱くほど、一般的なヴィクトリア朝の小説よりもインド側に理解を示した物語と言えよう。またインドの大反乱があたかもジナート・マハールを中心とした宮廷の陰謀によって企てられたという筋立ては信憑性に欠けるが、女性のセクシュアリティや参政権の問題を取り上げるフェミ

25) Bhupal Singh, *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London, Curzon Press, 1974) 260-61 参照。

26) Patwardhan, *op.cit.*, 50 参照。

27) 『水の面を』は初出版後33年間も絶版にならなかったといわれる。Violet Powell, *op.cit.*, 94 参照。

リズムに目覚めた読者にとっては、興味をひかれるものであったに違いない。そのような事情もあって、『水の面を』は出版後33年間も読者を獲得し続けたのであろう。

*テキストには Flora Annie Steel: *On the Face of the Waters: A Tale of the Mutiny* (Berwick & Smith, Norwood, Mass., 1919) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。